

## 超怒級豪雨

火星探索機「マーズファインダー」から送られてきた火星の表面の写真は、赤茶けた岩と砂の無機質な死の世界を思わせる風景が写り、着陸地点付近にはかつて大規模な洪水に見舞われた痕跡があった」と報道された。地球ときわめてよく似た惑星、兄弟星とも呼ばれている火星には数億年前の昔には広大な海があったと信じられている。アポロから見た漆黒の宇宙に浮かぶ青い地球と、あまりに違い過ぎる風景をみて水の行方がその後の運命を変えたと地との違いをわけたのであると想った。豊か過ぎる地球の水に思いをさせてスペースシャトルから撮られた一枚の写真を眺めながらはるか想像をめぐらせてみた。ヒマラヤ上空を飛行していたシャトルから撮影された七月末の写真には、眼下に広がるバン格拉デッシュの平野の北に巨大な積乱雲群が白い生き物のように覆いかぶさっている有様が映し出されていた。さし渡しおよそ四〇〇<sup>キロ</sup>、東京から関ヶ原からの距離の広がりを持った巨大な蛾の幼虫のような形の白い雲が、世界で最も多雨地帯であるアッサム地方のカシ山地にかかっていた。発達した積乱雲は見えざる空の壁、圏界

面を突き破ってモコモコと盛り上がり、その下では天が裂けて水が落ちると形容された激しい雨が降っているに違いない。

ベンガル湾からはたつぷりと湿気を含んだ気流がモンスーンの奔流となってバン格拉デッシュを通りカシ山地に吹きつけ続けている。南山麓にあるインドのチェラプンジ観測所ではいまから二六年前、一年間の雨量が二六四六一ミリの超怒級の世界最多雨を記録した。東京の二年間の平均雨量の二〇倍の膨大な量である。七月のひと月の雨量が九三〇〇ミリとこれも多雨の世界記録となった。雨季と乾季がはっきり分かれているインドでは、五月のモンスーンの入りとともに空の水門があいて突如として激しい雨が降り始める。雨季の盛りである六月から八月までに年間の六割以上、約二万六千ミリがとなる。空の水道で繋がっている日本の梅雨、その末期の集中豪雨のときですら四日ほどで二〇〇〇ミリ、こんな豪雨が三カ月間、間断なく続く計算となってしまう。日本での梅雨末期の集中豪雨での日雨量の最大が諫早豪雨の一二〇九ミリ。数十年に一回というこのクラスの豪雨もここでは何回となく降る。日本ではバケツをひっくり返えしたような雨と形容するが、インドモンスーンでは空の水門が全開となって、天が裂けて瀧のように大粒な

雨がたたきつけるのである。ピンポン玉の雨が降ると聞いたが、あながち誇大な表現とも思えなくなる。

筆者の経験では一時間五十ミリの激しい雨ですらトタンぶきの屋根を打つ音で声が聞こえず向かいのビルが雨煙の中にかすみ、もちろんワイパーなどがきかずに道は水で溢れる。一時間雨量一〇〇ミリの雨は瀧のように降り、その雨に出会うのは一生のうちで恐らく一回あるかないかだろう。日本での記録は一九八二年七月二三日の長崎豪雨のときの二八七ミリ。想像を絶する激しさである。写真には普段の数倍あるはそれ以上に氾濫といえるほど大きく広がった泥濁した大河が、平野を切り刻み生き物のようにくねり、ガンジスデルタを泥海と化した姿が写っていた。

こんな豪雨をもたらす雨や雲、水蒸気を地球上で全部集めても水惑星地球全体の水の一〇万分一とごくわずか。兄弟星の火星もかつて豊かな水があったはずだが、それが赤茶けて乾燥した死の世界、かたや豊かな海をいだく青き惑星と両極端となっている。火星がほんの少し太陽から遠く、少しサイズが小さかったのが原因と計算されている。水は水蒸気となって空気とともに除々に宇宙空間に

逃げ出すのを抑え切れなかった。もう少し太陽に近かければ金星のように厚い炭酸ガスの大気に覆われ灼熱地獄となつただろう。地球はサイズといい太陽からの距離といい神ワザとしか言いようのない絶妙な組み合わせが幸いした。そのうえ地球全体の平均気温15度ということで、水を中心に水蒸気と氷の姿が頻繁に変わって雨や雪が降るまさに適度な温度となっている。もっと寒ければ白い極寒の世界となってしまう。

もともと温暖化ガスである炭酸ガスが現在より千倍ほどの濃度であつたのが、海に溶け海の底から陸の奥深く巧妙に隠され、現在では○・○三%にまで激減した。大気中に三%含まれる水蒸気と連携して地球を見るえざる絹フトンのように包んで気温を上げ気候を和らげている。このフトン効果が雨を中心とした風情ある世界を演出してくれ、自転の軸の二三度の傾向きが四季をかもしだしてくれる。幾重に重なった神ワザともいえる微妙かつ絶妙なしくみが水惑星を悠久な時を越えて育んできた。まさに自然というお釈迦様の手の上で神ワザのごとく踊らされているようなものである。超怒級豪雨の二六二六一ミリも小さく見えてきた。

気象大学校、村松照男